

2020年東京五輪・パラリンピックで訪日外国人の増加が見込まれる中、観光地にある看板やパンフレットの英語解説文の見直しが進んでいる。観光客の満足度を高めるだけでなく、日本語で書かれた歴史的な物語が問い直される可能性を秘めている。

祝祭に向かう国で



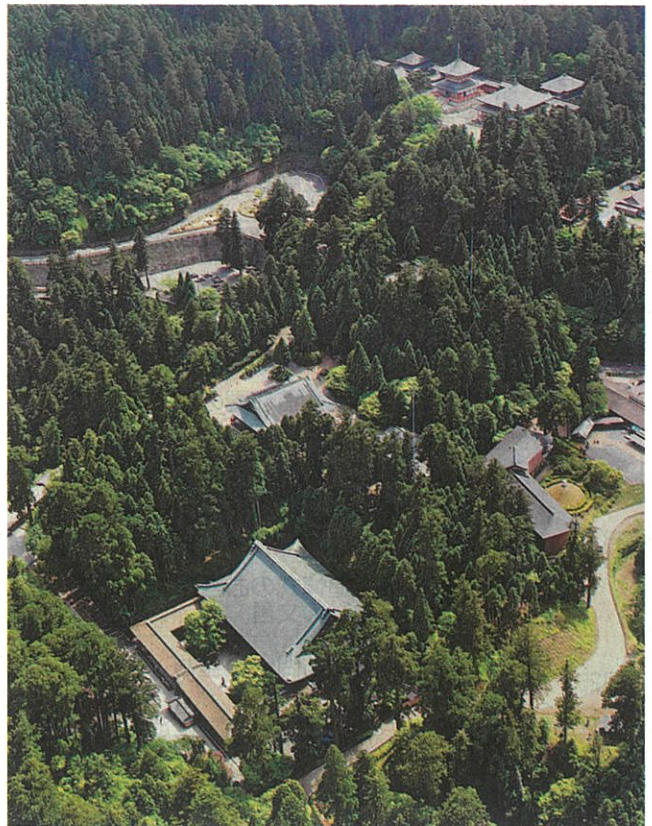
2

京都駅から電車やケーター前から、英語版のパンフレットや案内板を約1時間半。標高848メートルの比叡山には、1200年以上前に最澄が開いた天台宗の総本山延暦寺(大津市)が広がる。1994年には、世界文化遺産に登録。外国人観光客は増えていくものの、京都と比べるといまひとつ知名度が低いのが実情だ。

観光地の英語解説文見直し

日本の物語 問い直す

「海外の人が求めているのは、日本人と同じ情報なのだろうか」。延暦寺責任役員参拝部長の今出川行戒さんは数年



比叡山延暦寺 2007年、大津市

延暦寺を含めて42の地域から申請があった。「従来の英語版では日本仏教の『母山』となってきた日本文学研究者のピーター・マクミランさんが担当した。『ゼロミラン』さんには「鬼門は欧米にはない宇宙観で、外国人にとっては面白い発想だ」と指摘する。

「延暦寺の精神文化を地域全体の魅力を伝え、滞在時間の長期化や」

アイデアだ。ただ、この事業はあくまで「出発点」だ。

本来的な背景への言及が十分ではなく、親切とは言えなかった」と同庁観光資源課長の英浩道さん。20年に向けてさらに対象を拡大し、整備を加える予定だ。

延暦寺の解説文は、百門に当たる北東に位置することにも着目。79年4年に遷都された平安京を守護するため、マクミランさんは「鬼門は欧米にはない宇宙観で、外国人にとっては面白い発想だ」と指摘する。マクミランさんは、源一 今出川さんはマクミランさんとのやりとりを通じて、日本語の表現自体を考え直す必要性を感じたという。さまざまなかみながら、お互いに感じ合っている。2020年1月1日掲載



比叡山延暦寺のお堂の案内板を紹介する今出川行戒さん